

地学と切手



オレゴン州創立
100年記念切手の
マウント・フット

P. Q.

オレゴン州は アメリカ西部海岸に北緯42度からコロンビア川（北緯約45度）までにわたり 人口は約200万 首都はポートランド 札幌と姉妹都市である。州の大半はロッキー山脈とカスケード山脈にはさまれたコロンビア台地で 西に寄ってカスケード山脈と海岸山脈が並行して走り その間のウイラメット・バレイは肥沃な西部開拓の舞台だった。ここを目指して1840年代からロッキー山脈を越えて幌馬車がつづいたのがオレゴン・トレイルと呼ばれる道であった。オレゴン・トレイルはモンタナ州のミズリー河からオレゴンまで プラット河スネーク河 コロンビア河に沿って 約3,200kmを1830年から50年にかけて 約50万人の幌馬車隊の通った道で トレイルはインディアンの踏みつけた道のことである。オレゴン州は1848年に北緯42度から49度の間にわたっての准州となり 1853年にワシントン准州が分離し 1859年に現在の境界で州に昇格した。

幌馬車隊がロッキー山脈を越えて コロンビア・リバー玄武岩の台地の上をカスケード山脈に近づくと ひときわ目立つのは遠くから円錐形にみえて 頂上に氷をいただく標高 3,424m

のマウント・フット火山である。カスケード山脈には オレゴン州の南の方でクレーターレークがあり マウント・フットは北の端にある。北のワシントン州に入るとマウント・レーニアがある。彼等が目的地に入るためにはこの山脈を越えねばならない。

マウント・フット火山は後期更新世から現世にわたって形成した 開析された円錐形の火山であるが現在は頂上で噴気活動があるのみである。山体は更新世の安山岩・玄武岩の上に約2,400mの高さにそびえ 約15000年前の最終氷期の前には 標高も3,600mに達していたものと考えられている。山体の主要部は輝石安山岩からなり 山頂は大部分溶岩流からなっている。多くの観察では溶岩は雪氷の条件の上を流れたらしいことを示している。

山体形成後 氷蝕以前に北と北西腹で側噴火が起こり 溶岩が流出した。その後の氷蝕により山腹から裾野にかけて厚いモレーンが堆積した。

その後約2000年前に山頂南西約300m 下部に火口が開き 角閃石安山岩のドームが形成された。この角閃石安山岩は次々に雪氷と接触し 泥流を作って主に南西山腹に厚い扇状地堆積物を作った。この扇状地堆積物は全く角閃石安山岩のみからなり 砂のサイズから直径6mに及ぶ岩塊まであり 大きな岩塊は放射状の節理を有し それが運搬される途中未だ熱かったことを示している。堆積物中に多くの樹木があり この¹⁴C年代から約2000年前とされたわけである。

切手では幌馬車の後からマウント・フットを望んでいる。

新刊紹介

「朝鮮—日本列島地帯地質構造論考 —朝鮮地質調査研究史—」

本書は 総頁数654頁の浩瀚なものであり 10章に分かれているが 第2～8章までが研究史であり 最後の2章が地質構造論である。

研究史の記述は 李朝時代とそれ以前に遡っての古記録について(第2章) 朝鮮にはじめて近代科学としての地質学をもたらした Gottsche の著作 Geologische Skizze von Korea (1886)を中心して その頃の調査研究について(第3章) 小藤文次郎の1900—02の地質巡検旅行前後になされた成果(第4章) 朝鮮総督府に鉱務課が設けられた1910年から約10年間の地質鉱床調査について(第5章) 鉱務課が地質調査所として発足した1918年以降 組織的に行なわれるようになった5万分の1地質図幅調査事業 その進展の様子 地質学的成果と回顧 図幅以外の地質調査 鉱床調査 および20万分の1地質図幅の進展と成果 などいわば地質調査所史というべき記述(第6章) 燃料選鉱研究所の開設(1922年)に伴って行なわれた炭田調査とその成果について(第7章) と時代を追って進められている。これは標題から連想されがちな単なる年代記ではなく 朝鮮半島の地質調査にある時期の生涯を賭けた生々しい息吹きが行間から読者の胸に何ものかを問いかけるような功

績を極めた朝鮮半島地質総論であり 同時代の多くの真摯な地質学者の業績紹介である。第8章はアルカリ火山岩類 脊椎動物化石 平壤 太白山地方の地質など 興味ぶかい問題についての記述にあてられている。

最後の2章は 東北アジアの地理的中心である朝鮮と隣接する大陸地域および日本列島を包含した地質構造論である。著者の基本的な認識は“……中生代末期以降の大陸地域は展張テクトニクスの場であったのに対し 島弧地帯は圧力テクトニクスの場であった”という事であるが 2章とも いろいろな所説をもつ研究者の紹介に多くの頁が割かれ 本書の性格を一元的な地体構造論を超えて 内容の豊富な構造論総論的なものになっている。

ここに紹介するまでもなく 立岩先生は1953年から56年まで地質学会の会長を務められた学界の長老であり 本書は 従来日本の地質学研究者にとって 地理的に極めて近いところがありながら知り得ることの少なかった地域についての総合的解説書としても まことに貴重な書であろう。(星野一男)

書名 朝鮮—日本列島地帯地質構造論考 —朝鮮地質調査研究史— 1976
著者 立岩 巖
出版者 東京大学出版会(〒113 東京都文京区本郷 東大内 Tel 811-8814 振替東京 6-59964)
型式等 B5版 本文 654頁 図 127葉
定価 12,000円